

平成29年度新宿区夏目漱石コンクール わたしの漱石、わたしの一行

高校生の部 最優秀賞

多勢を恃んで一人を馬鹿にする勿れ

日本放送協会学園高等学校 3年 浅田 恵果

作品名『漱石人生論集』の愚見数則より
選んだ一行 多勢を恃んで一人を馬鹿にする勿れ、己の無気力なるを

天下に吹聴するに異ならず

「多勢を恃んで一人を馬鹿にする勿れ、己の無気力なるを天下に吹聴するに異ならず…」が私にとって、夏目漱石の作品の中で最も心に響いた一行だ。これは、『愚見数則』に出てくる言葉だ。『愚見数則』とは、明治二十八年愛媛県尋常中学校の英語の教師時代に書かれた漱石のエッセイである。いわば生徒へのメッセージ文である。三十近いメッセージは、珠玉の教への数々で、私は是非これを教科書に載せてほしいと切に願っている。

初めてこの言葉にふれた時、私はとても快い胸のすくような思いがした。なぜなら、昨今のいじめ問題に関して、これまでのニュースやコメンテーターの専門家が「今はそういう時代で」とか、「いじめる社会背景が」とか、「少年少女の心の問題で」等と決めつける風潮に、釈然としなかったからだ。しかし明治時代に、漱石ははつきりと「それはダメだ!」と、いじめる側を毅然と批判した。ストンと腑に落ちた気がした。しかもそれを、日本文学の大家夏目漱石が述べている、この事実が私にとってはとても嬉しい。

日本では、いじめ問題が今なお深刻な問題で、いじめが原因の小中高生の自殺者数が、減ってはいない悲しい現実がある。だからこそ漱石のこの言葉は、時代を超えて普遍的であり、今日的意義が深いといえよう。

『愚見数則』では「多勢でいじめをする人は、自分が無気力であることを言いふらす」だけでなく「人間の糟」であり何の価値もない、と明快な文で続けている。もし教育現場で漱石のこの教えが浸透したならば、子ども達自身も、いじめは自分を無気力だと示し、自分を人間の糟にまでおとしめる、愚かな行為だと自覚できるのではないだろうか。

漱石の文は厳しくとも、ふとユーモアと優しさを滲ませるので、一層読者の心に届く。思わず「憎いねえ、やるじゃないか!」と言いたくなる。例えば、いじめは「己れの無気力なるを天下に吹聴するに異ならず…人間の糟なり」と批判すると同時に、「豆腐の糟は馬が食う」が「人間の糟は蝦夷松前の果へ行ても売れる事ではなし」とユーモアで締めている。又漱石の猫は“見識を”を有している(『吾輩は猫である』より)というのに、漱石本人は“愚見”を述べていることも可笑しい。

漱石の代表的作品の『坊っちゃん』も、痛快なストーリーで色あせず輝いており『愚見数則』同様、漱石の真直ぐで、理想高く、清々しく生きるテーマを感じる。だが、生徒一人一人への温かくて真直ぐな思いが、直に伝わるのはやはり『愚見数則』であろう。教師と生徒の上下関係の厳しさを容易に想像できる時代に、柔軟かつ毅然とした発想を持つに至った漱石の秘密も、私は知りたい。これからも、漱石の作品を通じて、理想高き人生を学びつつ、漱石の目から見て、私は真直ぐな人、学問を追求する人でありたいと思う。